伊地知文庫
文庫20
287

無名抄目録上

連歌善悪の事

我と人の事

世名大将の事

頼政卿後恵撰の事

せうとの事

不二山哥但し由教訓の事

哥風情似忠強説法の事

井手の山吹并かはづの事

貫之家の事

関防侍の事

陳海路論文の事

晴れて見合人の事

仲綱卿慣詞の事

こゝろかのもれ歌の事

千載集三首一首入れ抜の事

千鳥鶴の毛衣の事

ますらの舞の事

閑の清水の事

業平の事

あさもがの事

健仙紹文庫

閑吟の事
中将恒内事
貫之躬恒勝劣事
同人の中より名字をとる事
後頼基後いづむ事
琳賢基後とぬむる事
懸書より古今かく事
猿丸大夫基の事
在撰が後の事
哥半碁句事
上句とりて秀句の事
和琴のわうの事
人丸基れ事
後撰をとりつがうてみる事
三位入道基後半みに成事
腰句紙のてをみを雑事
基後僻雑ずる事
女の方をんのうの所実
黒白神より授事
在のう井の事
藤合すぐこの事
千句糟糠事
言をいくくにくくへ必劣る
業ゐて成失事
代こ基中秀句の事
非哥仏言を新しくる
絶基中心合侍事
後成入道物語事
伝秀句ふとうする事
静御この言よむ事
哥人不可沈故事
おまる時自然言よまる
近年合狼藉事

増田文庫

奉名抄目録下

頼政卿道よりの事
後成恵卿後成恵卿の事
後成恵卿撰奇の事
後成恵卿秀歌の事
隠岐者の事
隆信宮長一雙の事
後鳥羽院女房の歌人の事
禽歌三すぐるこころの事
式部卿敦実親王の事
後恵宮之介の事
俊名書の事
清輔弘光の事
後恵卿後成恵卿の事
後鳥羽院歌判皆有偏頗の事
道因歌に志深の事
大輔小侍従一雙の事
奥親歌を不入心の事
家蓮顕昭歌人の事
近代古歌の事
取古歌の事
猶源名の事

わさらいさらえの事別事
為仲みやぎ野に花ちりてのち
小野の小町事
うらかつらとうく事
頼賢ずすき事
うこ祢の事

伊地知文庫

無名抄

哥ハ能のんをとくゆゑ俊頼の髄脳ハ
ふ抱ようで志ろして侍めり。始まりてしようむ天さうみ字。
中くまりていとろくいの西ろみ字ろぷうこと
祢どものづくしろいそ西ろ暁天落花雲間郭
公海上月これくのごとくハ第二のみ字ろ
もしろまびぷろぷろの能とをもに具てしきゆう
みをのしみすうすていうろりーるこをてぷを
へ和くを毎てさまよわくびくんくうれぶを能を
ろうみわくハ能の方ハるぐぐーとをくくむ
なーたくへぷろひまかぐうるくくへーきゆを

ひごひまいりあくあさうゝぬうゝとうこりゝハ
義ようゝく義と打ゝこゝ嶋ぢとわとれて紅葉
とぢのんごくそのあのようんぎゝとあくくもむべき
を古集乃ごりの作ゝもんてぬいこのぢ海れよ
ゝうゝさようりくゝを雑をゆるせゝゝりゝくの雑
あゝ計ゝこみ舎人ようりくゝえゝひゝくゝてゝりゝくゝ
さゝまでゝかまゝとゝば例とゝべゝうゝどゝいゝうゝも合ごは
物ゝゝ初ゝうゝみゝとゝりゝてゝゝまゝとゝ義とゝくゝゝつゝを
海ゝうゝとゝさゝむゝゝゝだゝくゝハ流法とゝうゝくゝのゝそれゝかゝを
ゝりゝむゝひゝくゝゝゝくゝゝうんだんゝとゝうゝごゝゝゝたゝじし
義とゝばゝのゝゝびゝりゝてゝ年ゝすゝべゝうゝごゝとゝてゝゝゝくゝゝうゝまゝ海

どのゝとゝとゝばゝんゝとゝべゝゝうゝくゝハゝ義ゝゝゝゝまゝごゝゝ山野とを
たゝづゝひゝゝりゝゝそゝゝきゝくゝゝゝゝゝをゝゝむゝゝゝゝびゝとゝごゝくゝゝゝを。
まゝゝんゝとゝゝまゝゝごゝゝとゝゝたゝづゝひゝてゝきゝくゝゝうゝゝゝゝゝ

夏の月ごとに花ぐさひらくぞ花のまつり

連歌（つけうた）に善悪（ぜんあく）ある事

所にたがはれ　ことばにたがはざるうた

そもそもくもゐのうきてゆるくかのうるはしきうたのうたり

ありそもまどをせうるふるうくなりといふいる

きこゆるうたをかのうたは　古今の歌の中より

さたにわびくるまひとびとのひとびとのいひ

まどひたるうたはざるもいかでいるかぐやのう

ことばるわどもぬびうしくきこゆるもばみをつき

うくさ枕ばかるかのようにちのくわりなど

ぬるとばかりいやうにちのべーぬきこのにうて

ぜんあくなるべきゆへ　かの歌の様にてなる所

ちり風なるちもうるはかりに

人をうーとわりよこうる

わがうちといふことばにうちもりせてれ　ありしむ

なーともあがしぬこと　そうーちうあれど

月をもちとたぐこそわざとをえんよやさしく

ちうあるこ　古今所に

をかすこそやいづこみうめく

ちーのうーり　雪いふりたく

こ枕いとめでうれ　紀の人だうとものそるやいづ

ことばの詞すぐれくいうるとわるひとの社歌

のこりとゝまる歌をとりあつめしに
神ごとにあそぶるやくれえぐゝつん
きりぐゝすむをうるむのちゝゆゝ
なのゞくゝそるるやとみゝわどゝ秋いわざゝも
初ゝもきゝすゝでゞうゝ俗り

隣海路論文

あゝゝゝろゝて言合俗一河海路を角ゞゝろ色
とゝゝ歌ゝ

ゝゝゝ

雑に、せんぎあまりしをつくりあつめたる
さたなりうんうくるんをつ
りうんいろりくいあをばかりとそ
さぐめをつ

歌らん人

みちのくにあるそぶ岡橋といひ世界をと歌
ゆといふ歌

わすれぐさ
うゑのめやなむとそうん
とうあるをつくさぐあをつ
わうんのいとくまをばん

つるかうんたぐまをばかたひとくかたし
うそゆうりるんかといふをつ岡をうん
あるくをつを後恵ゆのくへ年下いれをる
ひうくまをるくまをるふるおんをいひうと
為他人やいあるひあるべき歌をふひくを
奇のことれるひくきをゆうのを奇い
む離をうくをとをへをばを
るんあるうをへをとよまるんをを
ひをつ

臨奇の見合人書

をれの奇いるくびへうをあをすべをををるひ
をうそいあやまるあるべ帰をのををる松の

法院の小坊そうずきくあるせといつまゝ御
時ものかたり

宇治の橋姫の川岸せゝなるやゝ
こづゑよりかゝりかゝんい
とゝろりしをいまぐるこれの奇事どもこゝなるまゝ
かゞまして勝命入道ゆうをわくせ御ーうばちの
奇大きなる罪あるゆゑみぐきこれのかこれ所
とゞ崩ときいつゝのみなとゞづゝとゝむなり。
いづゝ後中ゝそうまんこの綱をばとゝ
ぐゝゝ御りーうぐあるゝぬ奇をいぐーてやゝゝ
ゝ御行ゝく女流かゝ彼御ゝまゝれどの

奇いぐーゝゝゝいゝゝゝぞゝゝきゝれ御ゝほし

三石大将事

九条殿いまぐゝ大臣とゝし河人とゝ百首歌
奇ゝゝ御ゝ御ゝゝくぞそゝの美ゝゝゝつゝ御ゝゝちち
ゝゝゝ御ゝゝゝゝりーうばゝ御ゝれたゝるゝいゝれぞゝの
ゝ信入道いゝの道の長者ゝゝますぐゝれどゝ
ゝゝのゝゝゝゝ

こゝにてこのまゝ。ちり落ぬるあるべし。思ふ

ものゝ。ことのはまでもよこしてゆ

仲綱卿慣頃歌事

はるゝ。ことびの百首に。伊豆島の仲綱の卿のり

つぐ。ながのこゝろうり。大貳入道さきてゆや

うの頃。ゆきまん人。ことば百年ぬ。寿永ゆきのこゝろ。

いつぐ。ゆきのうみといいそん。ゆきの下ようてさこゝろ

こそ。ゆきされ。ゆきこゝろ。ゆきみぬ人。ゆきをあらせゆ

あやまりぐも也

敕改哥後恵撰事

建春門院の殿。この合り。開路歌葉とつ

ゆ

敕撰は哥に

言こゝはまぐさあり紫ゆ。みゝぐを

うゝぐ地ゝ。ゝ川のきゝ

とゝまれゝ。ゆゝとゝの。ゝびとの。ゝ乃ゝ。ゆあゝ

ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なりつるつるあてそがらよさぐあくれりそれば。
いつひ〇そぞや〇
このことかのもろ浦
二条院和歌このませおいまーろる時異腐れ三位
ゆーくくまそさつくつるひこの道のいのくめう
きよのうくく清浦のの物見めさわく殿とすりい
ろりいくぐさ面目也ろるをあろ時のひと云ふ清浦
ぐまのいとこのもかのもといつすゆーをとるれ
くりそれぐこ位これを雨ぐていくいくくくくよ
てそこのもかのといつるめかくるこ山ごくよいつぐき
くくくるくるくるまでいやぐこきるくぐ河なくすもうこ
ぬぐこくくくくくくくぐこくくくくくくく

とぶらひくれば、剃髪して師光入道かたる河や
ぬしとそ、ぬしなりけるなりけるとこそ
はしるべかくるりつ
しかるにそのこびの剃髪とぐくるあまを
うりそそ、わくるくる歌昭法師は剃髪をさせ
し河ぬこの年れそころは剃髪していくつ
ろの物
のそ、いとをきてをそびけるとだしあるく
はぐきをうりかくろ河なぐの物やそころのうり
ぐ〇てさぐむべしそ、ぐとそのこびの歌昭
よあひうりそこのまあわてりいぐこれをかる
河の宮ろあん菊社の縁起にはりとしらば。

はぐろそそかくそあひくうんをすはりそう。
そうろう歌昭おうぬをとらあるんあるんやて
思て屋ともせばぬんぐはぐくはぐくはぐ。
あれが奇といちく〇どぬ年ざきのろくくみを
しうぬ。をとそそそあうるはりて物へどをす
おりら老の切りとりあんは物をこのあ
をそそて孫宮祐兼はぐこれぬんぐはりさぬう
のあるとぬいくくうむとそれのこぬりハ国をたとの
ぬ兼なぐそそそうまあかるうをぐくあるそ。
無念なるまあるとりとぬ物狂ハ隆信朝ところ
河をそむぬ歌昭法師はたる家の百首、年合れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時にいつごろまでかくあるべきことを
うらなひおきさうらへかくこそうらへ
道とこそうらへ
りあるべきこの世の人
行をもつとめ
どとりとむ
ちかうりいかあり
しまことこそ
すぎゆくなれ人のいつるをいとへ
不可思議神通
行のしるべ

ゆくあるべしこ

ゆくみふくそ法をそ行ずいとくんとつぶやかれ
がごとくあるべきかわがはぶきまりうりのふの
なるあるまひとをわづとそれをうくあるの
つくまいうこなすべきは業のあり
ひまくこそみるべしごとわりへそち
ひとをもふごとにはいふごとわりくあるとそ
そんとわひとをつぶとそのみちを
あるべうまれいかくかしこの命にうまれ
てく招請とべしこうきこそいぞこそ
胄もあるも道を尋ぬ
どあるこそひあるこそ行ちぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後恵法師が家とて所林苑とえんづのくに月ご
とに舎利参り給ひて祐盛法師うの法花寺にて寒
和尚なりとて新しき所のもとさきり作りの食
ごとにとて所をとりこうれいぐんくぐ
年ごろ仏道に入へびくこれと
諏訪にて参り給ひて法花寺にすはやわらび給ん
とひとりをうくぐ法花寺ひのた
つとさんぐとこそやこれいとりつてき寒句
のもとでうたりあるもびひるさうのりれを
なん祐盛こう給ひとぐくはこのいつこび給へう
みかをとこりとりもとあれど行にはこて

ちどりとうぐいすをどりもこそやいわうづさかか
らどうしとすはこのかなるかり物ありこびさま
あるどかのもろこへのはうのもあるもとふもと
いつも古所あるもとあれいぐまのうりと
ままむとこりあるべくびこれより行る遠
春門院の殿とこの方合ともしの毛あくこう光
仏奇給りつくこうこうぐ判をしこが
あるまうこうやこうなぐうこう仏はるのを
ごろもものんいあるどの中へ作づり
かさうこうあとこんも給まぐつもこの花とえん
とびはるびこうの日とあづるぐ

哥風情似忠孝統法書

猶盛法師がいくつぬ庄園の三ようの非数とこゝろ
教はれたりと申されし庭宣よみちぶみと申されば
茶まいりてのつゝのまきたる紙ぶみの
忠孝の統はたゞ大事と申されしこそ
小事と申されし茶まのあるゝ事わりといふ
事のうゝしさ和哥の風情して作りぶ所き
かゝるうりんてぶるまいりとうたゞ
しくうりなきべきこゝろまこゝろ
ぐわりあへくくまんとるんあてうり作

まゝといろくき

わあれありそうの日わるんのりんありふどうさ
いつまりくぶうこさまあがうりいぞうりそる
つゞそうりぶまるのとくきといふいそうすて
業そあやしいひうろふどうわる老人のそ
くやるのゞいふあこのまうるゝ
つまはわりとこそ作ぶうなのくいひいぞうり
そう養生法師そのの中よわりてこのまをさて
て須ぞくれうりくゞうふまをあ
じゝふのうさまゞ
あゝしふがうこそう
つまとこそこそ

ちとせのうたにぞうとんくわやしゅうてぞ
ゆへとうふのわるのべりまうもぞうごつぶう
くこぶらへーこんぱちれうんわうときていぐく
あづひまうこぶしいつぶれごつさなうご。
はうしてもあやてぐあまへといるあれど
いそとうおこまとまとつるまふおいのちい我
まんもあれこんはうまつはうるもも
ちびうまとうりいひとそいたうりぐかり
ううぞとき物へうーぞこあづひわひ
てぞとひこてぞつぐう紙花ーうりごみと弟
三代の弟ーうくはうりぞ薄

はうーこまうてあまうはぞまこはうはこれの落まて
との義ぞまこうの薄ーこてぞこうさはうりぞます
かのとここーいかるぐくて人ぐうわ形と
いつぞのますぐこをい方巻集うりぞ千すのうぐこ
とうりうまてゆうべーまこものすくこーいふる。
真麻のんへこれい後れ形ト方うぐこうくく
はうぞまこものいことうきそこはうこふわて
ぐこのみそれうあうはあこうれとくきて
ぞまうことすまこうりあこうりいんへぐますこうさん
こうこーいつぐこをぞ暑ーあうなうり
久みうこうこれのおぐくなへこぐれこうりぞ石集

なぐにぬ〜こんにみくるまーはのもぐ和うの
ゐ〜ひやうのかうこ〜とうらひうぐまぐさのに
ぬのまーくんあまーひくちぐぐぐうようぐ〜ど

井での山吹（ぐき）并がうじ

わうくんかうくいくぐこの絵（ぐん）わうて井でこうふ
ぐにぐうくて一宿（ぐん）つまううこと侍さぐこうろ
に有こ海井で河のぐわうる神（ぐん）ゆくとこびわ
らびかの井での古良（ぐき）絵（ぐん）ぐこうなわや
河ーこうるーびうる石（ぐき）ぐこ千余（ぐき）下ぐうぐさの
こやいぐこくあてこにきんぐこにぐうぐさを
のこ〜いんこぐぐこうたてうるあうようなん伊ー

ここに古者（ぐき）のこうに伊ーとかうこひくむーの
まーぐるぐうたづひ伊ーにあぐでうま井での山吹こて。
えうようぐれうこうこうこみこ伊ーこぬいぐこうりあう
ぐぐこうぐひ伊ーうぐさうるまー伊ーりかの井ぐでの
古良の書（ぐき）ぐこ〜せやを伊ーここぐこのまんへうお
ぐこ〜こ〜古ぐこうる山ぐさむーくくみ〜伊ーさ
その絵のつまんいこがこくくきのあわこさこて。いこん
こうるあくうこうりてなうん伊ーこれとこやこうう
ーここて伊ーやぐこうの井で河のこぐこいこつこて。
ひまるなくく伊ーうぐ絵のこうこうこぐこのくく
まぐ絵つこやくこくあんやうこて他（たーよ）ぬいこぐ

まてくるん行ゝされいづまとゝ行くさうゝ
ゝとさがゝく行りたくし下前のいつのうひるく行
まゝいうくゝたうゝに茅ゝてあるとゝさ行くしば
田行ゝうゝいゝさいわゝとうゝいでゝうゝとゝて
あふゝもなくわりゝう行ゝ行ゝいゝといわゝを
なくゝるん茅ゝく行ゝうゝそまゝゝうゝく井での
行づゝとゝゝこゝゝやゝうゝあゝまゝて行まゝゝの人
思て行ゝいたゝぐあゝゝいゝるゝあゝづゝといゝふゝゝとゝて
行ゝうゝそまゝゝもゝゝびゝ行ゝゝどゝさわゝどかゝづゝとゝゝ
ゝゝゝいゝかゝゝゝゝさゝゝに行ゝゝゝびゝゝゝこの井で何よ
のゝゝゝ行ゝゝゝゝ

すみこの人ぐうひとのづくり申のごとくなり
てかーこれゆきのぞくあるべくもとぶくうてぐさん
とおろうへもきくあるべーこのときこそおろの
いぐーつきまきくぐおろうへゆくゆくより

開の清水

あるこのいそくあつまきれきのきづくいてみるべく
しるを井とあるべーかぎやるべくこのもり行りり。
きりいあるべきこのいの部の東の行りぐりきそ
ふるもあるれぐそこうきこれるこのべにそのーぐ井寺
四寛房の坊図梨といつ毛信ぐひとりこち
東ときれるかぐ拾どこ法ゆやるるとそるゆ

あるべあるこのもあーぐ我きあんのりぐるこのとなくて
屋あるべさあーとべこのあるひくかるるりるりるこ
てきてかのあるべきれるこのみことるそ蓮暦
のきづめのこーぐ月かるあまりのこるこ井ちこ
ゆくあるべりこいかーてあるこーこ行ぐきう
まりくきるこのもかるこ行るとかづくくあん
いるべかきるこべ行るまるくきるこ行るとかづくくあん
開るこりるーべこきこーべるるこるこるこゆく。
のるくまぐきるこりるゆきそみるこりきき
いーのくるこりるのこるこるあるべ一丈くるこるなる
ゆくりくべるりるあいすあるこるこるひこーのせてきん

きうの法なり道こうもこと所ごとにやいりくん。
いまのいこいのきりへありりく道河い水とあくて。
ゆんどころもありまで背のあごうあるうげようひ
ていうょうんあがく行ーの国桑かうくいく。
このーゆにむひくぷこうゆんぷすひそごふさ
うう家ちくくまで行きうぷれんのとこうとは
きくゆでいうもたごくんの井あるんわーごうきう
ありうくそがくう行ー

貫之家

或人云貫之がわーーごうすきくうあのわとはがごの
こうごうといくくぷこのゆ路ーうはぷんごーの

すきたるもと

業平家

又ありひくの中将のいくぷこ桑のごくうんーうと
なのくたくくうけうりてよちくく
まで行くくくーあごもつひとちまれ
ごーくといよ物ゆくく行うくをいつごうの人きを
きくきくまのちにまのくーのゆくぷうりか
ーてうん行ーあぎーもみかまうにかごもあくく
つひうくく海くくく古代のあくみく行く中ひ
時ゆくぷうしくうくそやくゆやきごーてその
ゆくくーさありくれごー世のとをくうはぷひあくひく

[illegible]の大[illegible]

関陽関侍史

みすまうのまつりの我さんのきれものぶ菊とぞあり
いへいまてんをいかりういのぶ[illegible]とけりとのすくこあり

あきもかくこの的神

[illegible]園こされこうりこあきどうの的神やと
うこいまひ園の寺れ神祭とやいまま
みくぐこおすぐこえこまひくがすこうこうぐ
の神まてぞあこすかるこれいむ[illegible]
あこるの神にまれこと[illegible]
けうあるまく物こぐくこことあきこん

[illegible]神こ治どこあこまつるうきこ権[illegible]なすと
まありきん

関的神

金[illegible]関の的神[illegible]のをこまつ
のまこ屋のあこと[illegible]
なりくすこ治るうべ[illegible]
うまてみまばむこふこさのみどの的[illegible]
まて和琴をこひ良[illegible]家真[illegible]
かまひこんかどのまま[illegible]
いこくこて治[illegible]

和琴れ[illegible]

[illegible]

人丸墓

人丸のうつ[illegible]大和國にわうちまつの道なるべし。
人丸[illegible]
かの[illegible]

貫之卿恒勝方

後恵法師[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

て白河のわんよ山寺にこもりて侍ニ後拾遺ハ
ぐうさぐわんぷうこうるまなすがたにうつしおかれも
まわりたれいたるにこの僧とまうしたりかどうし
こうるたりく後拾遺よりあり侍るこの事
かうりいでくぢめわくこひこぢやうより流
の作のあるむさまでかくこ拾遺後拾遺さくく
こびくうらうづこそぢうひとぶあわづこも侍そ
とうふ帰思のわたにあがてこれば侍ゆうづれく
つとかうぢこれうり侍べきなりとをく拾遺ぢ
なれぢあるべやくぢうひとびあづこも侍まづ
きぢやいこれうまいあわやうこぢきこく侍く

うちとの侍ぐまりのなかりわたしそかくく
こしにをこれうまくこしにこうひぐりこちふく
ありひへくうあくこ文ぐひるくうの
後拾遺ぐ言とでいぐこうあ
あをの八道ぐ後拾遺ハとをる日がこれぐう
ぐまりうくぐうふまうりくぐこのひりく
世乃中いうきこありこうげこれや
ありひすつまでこうるれぐうりうる
こみ言をうこひぐこうりけまぐ後拾遺ハこうくこうり
をこぐぬこうりうるあんぐこかりをうる永縁僧正
この事を侍こうぐこぐうりぐこぐ侍ぐうと

わすれひくぞうまぐ物ゝうせぬべくて紙ゝとゝ
いつをゝつのんちこそとれといつかをとこゝこ
そうゝをせけまぎぞ時の人わりごゝさもゝれんと
いひゝつ今の敷教入なゝうまとゝうゝ山ゝやゝ
ゝんゝのいうゝせどゝしぞゝくゝ
をゝめうゝうせくぞの人よわゝれゝるゝぐ

同人ゝ中に為家をよむ

法性寺殿より云わりゝうゝき後鳥羽ゝ
つゝうゝゝ為昌卿まゝて云ゝわゝゝ
うゝうまれゝうゝたゝんゝかゝりゝれゝぬゝなゝ後
てゝうゝいぶゝゝてゝぬゝいゝみゝゝのびやゝん

いひゝうゝとゝぬゝぐゝうんゝまゝんゝやゝいゝれゝる後ゝぐゝ
をゝ後ゝ千ゝゝ

和のゝくゝのみゝゝゝ

ゑ。りくしの弟子のあるひとして、和泉の前司が
御ことなりけるぐらとて、その人と車をあひのりく。
碁後のの人ゆゑむひとりのあるさかの人
うのうちに、十八ありそのあ八月十六夜にて、さへあり
しるべ童子をまことにけりよのくうこのうれ
白とかの

ありのあきらうのうの月はたくく
と拾くしくたぐめいぞれうしるべ光とぬく
うかんぐ春ごとにそまとあうさん
どぬきをうとをのめづしぎるあさとぬうし
う感ぎく拾くぬうとりのごうしく。

ひうしうあうりうそいまのうれ人のありさ
まのごとえうしのまを拾へどそのごうれとうの
ちううう人のふつうのまうしうきうれしば。
の象大納言伊尹卿中将大下雅実たぐとそいん
ううう人のの思くぬめれとしうびあのうとと
うそびぐとうとうそあつぐとうん人あくぬうと
まとあうしうあうう師弟の契とびしうしう
うぐとうみうにいううそ後朝のいとうづべうも
あうどぬ後朝いとやんごとあうとのありうぞ

後朝碁後いづぐむ
武人碁後い後朝とび蛟蛇の人とそさうい人ぬと。

こまのみちゆくうてこそあるべしいとれけるに
後鳥羽院うりきて文時朝臣のこころ秀句の
うつくしはゆきぞうりそう秀句なりこれぞ
のこまひろう

腰句後のてをみを雑歌

みを雲居寺れ初づつものうりて社のうれを
ふと後鳥羽院ト

あのぬるる袖社のをうれく
賀べうりうりよりうりをる
ふとかうりけまでとれとをうて。
墓後びむへて雑ぶいそうる弁ーを

こしうりをれをそをみをうをぶうりを
くしきまりーをくいくしくぶをくしく
をうりをうりをうりをべうるをく雑をうれる
ぶ。後鳥羽院ぶもかくもいをれざうりをの雑ぶ
のをうを蹴賀がおうりをるんをやうをう弁
てそぶうりあづくれといひいをうれいぶをく
うをうをうりんをうをうをうをうを弁をりか
あづをいふよ

ほうをうをあのをうを風いをむうをで
とをうてうををとをづくをうをなをあをうをいうを
まををたをうてをのをいをびをつびををうを

ゑゑに。後教しのびまわりつれろ

林賢基後とおぼゑうまし

いろゐり家ろうりうかの林賢と基後とたろの

わしかりきれいぢたぐうゑんと思ふくおろ時後撰

乃ゑれ中ろ人もいとをとこびみぐ沢さうかぐり。

ホ首をえりいぐしてけさけぐひくかの人ゑ

りうへのていろろ。ろ人のことやうなろ方

合をしてがちまのをとゑ後くつうまつ

沙ろ。判つろて後ろんそうりいぐろけまび。

ろ後をかんく後撰のゑといふまつとうひ

ろうびおりしさ後りゆろく雑ぎれろうと。

こうかしこにりてあうろて基の後にあひ

もしまびがつびなの四人ゑろひもとろ

おろびおろれ上石まもとぐれ後つろ奇り紀

うおろ後ろまへて垂攪しきれぐかん

人いろぐうわろひろ基後ろりうて。やを

うびおもいれろまでぐひおりうる

基後俳雑ぢろまま

後恵云法性ろ義ろて方合おりろうり。後教

基後ろろり判ぢろ後ろゆとかくして南庭

判ぐろる後教方ろおり

くちおりやろる井がれるをむ。ろと

ありよしの人々はあたらしきものを
これを墓後鶴とんでそどづいさらにこそひさん
しりけれもむしまややあるとあれしぞけるは
てびりさわど後れうの花よりこと樂ることへど
そのうき厨下どうひの判のことぞのくうこそ
さいつせうとと紙作うるうこうこうん後れ和ト花
い鶴よりわるびい龍なりかのあびぐうやぐうり
をうむと思うるいぐうりうるりうるも
かまづあるあれわくんこうしまーの
ばうとうるうりうこうさうるも墓後弓和の
人るれどおりようるるくんのうこと和びうるせ

の仏うれびうこうにふまうくうく共おりくうどおりう宮う

艶書よ古所かくまま

あるうんぬのりうりふうこうとえうこうりぞのうこうこう
二首ばりうどれうんうてばうぐうせうりうばうこうを
みまびうの方こうそおうこうこうこうこうこうこうこうこうの方のへうつうを
まびうさうるあるびんびうぐうせうまーこうこうこうこうん
うのいうこうりうきんうるうるうるうるうるうこうこうこうこうん
をうこうくうくうをくう仏うどのうこうをおうるうるうるうんよ
かうりう仏ーうびいうこうきまーこうびうーこうりうこうこの
うのうびうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
うこうひうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

うんでゐたりあり

女のかたちにけうを加実

勝命猿丸太夫墓

武人たちのうたのしるしとしてあるべきよ

うぎのせてうまにのみかへしまつり

黒主神に祝事

志賀乃郡ハ大通りすぢへくぼざらり
黒あつの神とかこいまつりすぢれいむしの黒
主が神ハあれうたなり

表撰の歌

みこむろどもわくるまでゆ富士づり山中へくぐらず
山のこなんがもとをきろわとなりぷへいるけまで堂
乃いつどもをのどさぐらようなのまぐれしかるしひ
ぐひくこうぼくさまーゆ

志のこ丹の事

武人ハ言関卿有賀朝臣の家上人七八人
あひともひくだわ国づくうこうぼくびよ
ゆうまてうあーあうこの河おうあれきう
だうのあわきうーやうくーきがみこまれぎ。
わやーくくぞのえんをあつ人ーしひをれや。
ぎれうう人もみうりるぼーうわひぐうーぼーの
わうしてぎんきうさわきりうまんてうぷうれ
つーとやうわーむーてぐひれぐれぐぐよ
丹のうぐうぐーいんくいーこまーやや
ぼく感ぐーぷーこのてんーぎのこ丹
とうつ丹やわこーぷみかあせくぐ山

どのといいまして給りて雲りにけり
あらぬなどいひゆきてへりぬれば
風ぐくそこにむまめてづくしの
十題うつくしみあきぬるもぬぐくう
づきうれがぬぐくあこれあひそどろこびか
しこまりくさりよりぢちく土佐門内
大下家は月ごとに新法きゆゑ給ふ
ものびくゆ筆などかう時と給ふ
古寺月といふ題にそうあるまつり
ありもきろとうのてれそのを井
なれきくくしとのうに月ふか

文永三位入道とにもきてやうにけり
まつりうかぬ入たがきろべくしむ時とりぞんを
ありふ給へつうとかのくちんせこれよりとて
きうりう感ぎこれ給ふさこの中信馬ふん
相あれぬ様きうあわどあまとりうきにい
方にうあうまとと乃てどそのうちとそまんを
いの中ねこ家の方ふうまれくゆーう

方半臂句

後恵物語の源ようひくこ遍昭信ふ方に
さうち孫いうまとそもむどくうろ
ゆうろうみとるでとやあろうん

こうかの中ほどにて
えんまくにのこまくといふ事ありと
いふ。ひでよりのとやとの事とれ程にもあるとう
めでたく給わるといふ。かくるゝ事ふさう
ひとりいつまでにてうりこの事
あるぞ。それよりうく月といふんとそんこと
とさふといふんとそおもしびきといふ。ひの
まへさわどもでめの事みなそふやう奥
のしほりの句よりくはぐきをくぷとのやとあ
ふとをきてうりいろうくく奇のもいでぞふる
まつりけちうもたなるゆふるきんこうまとば

本歌句とそいひけりもんもはうやう風流
哉りのあわどもやうそくの中まがうとある
ものあり。その乃ニ年一ニ月なりくかなとなれうり。
ひとみとみありもますべらわく稲どはんん
むのくいつあびちなりくきをごうう
りのすぐるよ花離きいりあまぐものづう
又鶯信とすること格といふことをうひとりいふと
いつべーくくこの句あとわんでもん稲べんも
乃句もせんいはぐさのこそまあいたぐそて
りといふ。ふくなたりかくいそずはんひはふ

うちまいしとそみくしうわとうすん仕

藤合すぐる

柿楽の中まそぐうい面わらぷとまの
うり。五指まで指くとうれくよまひとうりて仕の
ちとまいぷぐくつぐくて走てまいべうひさうく
ちづめ一反とぷまとよまうつるものかうの
とく指みぐうわうしとふこわうをくうちをと
ちうこ反のちづわうぷうりくまいぷこうを
ぐしひぷぐうねうんひの白れいるりぷのとふとみ
ちとあわどぷぐくうきまいぷとものづうかうこ仕
なうべーかようてちうぐうんんいぷなりとくふ

れうひううん弁のごくくあ方といくそぷ
まふ奥わうまーべれぷぐうをぐうんひまん白
わうまひといむぐあ方りさうどぷそうすぐる
うまいひちんうー

うこの白れうわる秀弁

後恵こぷあふ秀白と思えうれどりとすふいひ
うあうりまーのううこ後法たる右弟の四弁
なうこれうんりうすこのまうりうぐむきば
入りとあうぬ松うつーうなこ

軽改ひあり

すこうーり松のこるりうぐむきば

月かくしぬるこぐらの山

こゝの百首うたに上の句ゝ

入日をあらぬといひ月かくしぬるこぐらの

きこゝろをわどもしらぬ

遺恨のまゝなり

前ノ詞糟糠

二条中将雅縁後ノ前ノ

とはゞ思ひもあるべき道資といふの前ノ

月いとゝやうきこゝろの中のもるかゝ

なげかせてもみいくこゝろとい

れいろ〳〵くこゝろの中の中と

いとゝすゝぐこゝろ

のゝこゝろをもとゝ

み形成ノ前ノ

すゝのゝ月のゆくゝまとゝ

わうゝあきれとものさむけさ

これをゝ見るこゝろ

こゝろのゝこゝろ

ゆゝこゝろのこゝ

ゆゝこゝろ

ゆゝこゝろ

賛國法師

こゝをいこゝ

賛國法師

ぬかなるこのとぐさのそれとわまりさいくこ
てとうくすれぱそてゝまぱまれくゝのかりつゝ
あるさんゝやくぱにてゝもなたりのたゝりと
かしぱさりたしきゝ

書紙に云

かゝしとんくかへしとやゝぬとや角ごゝ
ゝあゝすんゝもあゝごゝこそ思ふ

このあごゝんなゝうこてそおろわどこゝうしひく。
さぱてゝのあとんてゝまんゝとゝしつくのちがま
集の中ゝあゝどゝれで
ちづりあがかゝしとやゝぬとや角ごゝ

こゝまいづくゝもとゝすづよ
こゝまいるぱされゝりゝゝやゝゝうをかゝり
あづくゝゝくゝくゝんゝとゝべきぱゝまてゝ
俳諧句ぱかゝりすゝあゝ
四条あづゝりといゝゝしゝんのゝたに
ゝゝどれはゝにこのゝゝぱなゝむまば
ゝすみゝりゝゝあゝかゝゝりゝぶゝ
このあいゝゝるゝどゝゝゝぱゝゝゝゝゝゝゝゝ
そのゝゝんぱゝとゝみゝゝゝあゝこのゝゝぶゝとゝゝ
わゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ

白とびとりん風ことりの声にんどころのなつさ
河つぐらゆ(ゆ)かり橋あるすぐ　うぐいすのとりがめぐる
なりしもゆづしきあうよりふとりわりて。
ぬぐらゆうるゆ橋ゆんものをさりどよてづくよ
くいりしてしたのの白とばありひるを宮うに
とゆづく橋り
栗ゆ(ゆ)して盛(もり)ゆ中
愚(ぐ)塚中(ちゅう)り
ちりぬ橋ゆんゆ橋なくもれり　松の色を
ふりうくぐりけさのちり雪
ちをと後恵ゆんづていくぬぐられるみちと

いつづきゆあるりわりるくわをり羽(はね)ぬ河
てみくりりりふしとありりりりゆの与合り。
かすをと後恵ゆり

クムるばよゆりりとわりりりあをづ。
すみりりりよりぬぐ入ある
そのりびの(び)ゆ清(きよ)楠(くす)朝(あさ)たぐあるづやりり
りりりりしりりくがれいすをのをとりとり
りりしゆ人の入海(うみ)とりあづあをぬんづ橋りる。
のをなりゆをとばりづくりりいひなづりをづさを
いりくあんづをづりつれぬづりくみてりりりゆ
をなりりたくいりとりりりりんのりりとけり羽り

ようんとごうをづ
ゝまとくとくゝゝ梅
とのづゝいぐくゝ
りゝめうゝゆーとわ
そのけぢめいゝゆゝ
句ゝのふゆゝくいて

静緣こゝの春ゝむゆ

静緣法師ゆづゝぐゝあとかゝうく云

きゝのゆとゝくゝゆ紙ゝへなゝれゝゝ
ゝゝにゝいゝりゝすみゝゝゝゝる
ゝゝそゝゝゝゝゝゝくゝゆゝゝゝゝゝゝ

平ゝゝゝゝくゝゆゝりゝゆゝじゝゆゝれゝゝゝゝゝゝ
ゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひとまとてうらわすれさるもしらは
やどてとちらのはりのうか
ふることをうんはりてふるとあるかはつるつぐはんん
とぐつまうれしうしかはくくあらかなとをれば
我ゝにすぐれうるかこあうもづわもわうぐる
しつちのひとすだ宣
かくてこいのちやうぐらいてうぐうう
秋ぬ我の月のうげとのこんく
野べの露ハうもくてやこぐれつ
そぐうすぐはぐさのうもぐせ
うううのりのやんれなぐむしん

まつ秋ぬぐうれあり時の月

後恵ゝ 題捕ハ方のに

ありてんくうつのうひうけまでも
ううのきゆりぞ乱なるもうの
この方と後れ和ト感でうこれいむしてのうこ
ぐうしてぐふあぐうう乱けうけ方也ものつもの人
ありぐぐうつのうひうるけまでもうるの義義ぐう
也ーかりうるうぐうもうしーあぐくこうもんぐ
とぐぐううぐ猪うう

哥人ゝ之絶消事

後恵ゝ和方の師弟の契むとび行ーぐとぐあ

ことごとにつくべき事なりとて、実の行なり。
我とまことにて仰とたのまれぬべきものとたゞ色
らるゝかぎりこゝろうるべし。ひとえの世の言葉にて、います
べうぞさうへ一よりかゆゝ事とおぼえられば、行なり。
わかゝしく我人よりゆゝしくて、程にまかりぬる。
他所にて我いこゝろくくしこゝろ言葉ゆゝ
くわうもぎきまゝ、後世をもたゞ
なすこゝろうそいませ、どもの真実なくて。
今いこゝろ後よりうるものゝ前大納言
なごきこゝろ道と他人とをくみごさ
きそなりし所のもくゝぶかくとゝ

人をくかうもし我いこゝろうそこゝろ後
よりもこゝろ言葉をいれどゝ心づきな
こゝ用こゝろまぜこれば、ゆくこゝろうて表所も
いぞうん秀逸なりまぶ人もちひどゝ言葉南殿
こそ人ごとにこゝろくくもわこゝもきこゝ也。
後朝もいとて度ごづに人こゝびさいの色で風
情をこゝろすぐこゝもゆゝなる所こそ人こゝと
しいは行也かくこゝ也いたこゝの為ゝ
後恵いこゝのごこゝ初心こゝれごくこゝ
わんで行なり又我心とゝ行ごこゝてゝ中を
神ごゝ人の行こゝもそこゝ也こゝとこゝひ行なり

こゝにハふるさと人のとゝ（行）まゝ
にうりてうるまゝやすすれ物にて毎れど後
恵のうみうるゝびとゝ人ハかゝぞうゝよこと
ゝまゝわゝどこの流言とわやまゝゐゆゝや
非哥仙哥と雅ゝうゝ
哥ハ名ゝよゝゐゝ哥ゝゝかゝゝもゝどゝとうゝと
うゝゝゝゝみゝうゝゝゝみゝうれゐおゝゝの和哥
ゝうゝものゝゝ善恵ハゝゝゝゝゝゝ也守かゝうゝ
ゝ述懐ゝ哥ゝもゝまゝゝ行ゝ中ゝゝゝれゝゝの
夫ゝゝゝゝ文ゝゝゝのゝちゝゝく
人ゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

この寺は仁和寺の法師阿闍梨とぞいひける
人のいりたりとのりたりける所なれば世と
もなくうとうとしき事なり
福ぬし
うちいたれうとうとしきまとをあ
花道家の舎僧事
後恵ぎたる和尚の云ひわたりたるものげにくく
いたりあるべしまはぎはいかにぞてたく
い花道の家の云ひけるやうはいかに
さうにまてはいたりもそなれつて聊尓
あるべきにはあらぬ道とは物にてやはべるべきとぞ感じ。

そもそもことの発端はいとくちをしくみぐ
道ばかりきこしめすものはあるべしいかに入
もしもみかものあるむしろにたるべくあく
ようにいぞんとあるべきにはあらぬ
ようあるべきにこそ思ひたるようなれども
あるべくしきいちにてはいとまもくなんあるべし。
毒目の舎にはみな寄りて懐中して当日の儀いと
つたなきかとぞうたがはるべし。當座にと云あれば
ものくにあるべきにはのうつ流思ひあるべうさ
ぬるまでもそなんあるべくあるべく侍べし。
さもあるべきことがらにぞんじ艶

ゆくゆくは

近年會稽落書事

はじめこの会稽のくにのうちにはまづ金谷の
ちうしゅうにてめでたの樊噲のうちのうち
さかのくぐきにあるみぎりぐさ
うぐりのいぐうすたうきく郡をいづ
あわどの来いたるこをうう商売り
ひぐこをの葉ばをみてけり
をさもの。枝蔓の河をもとめぐるを拾ぐう
をも。先達のもちづず南く水沢はちう家色
どもいとかてこいわどぎよ河れ毒をちうく

なかそうこんいのまれ
しきをさむうぐへのうこんをひく。
編版をさたもれぐわんどうしつきそも物
ちうれくうちきをのうりはをまくを。
うのうれはことのびうく郷ずうをうを
ゆくそうびをいくうをとうあげ
うさ海ちどいうんづうすぐくうざう
しきはつきくよちのくゆこうしつのてを。
わぐこびちうげうこんのいつそくもうですうどてを。
ぐこんまひう通をこのむゆこのうしぐれ
ぐをゆくぐ

後成入道物語

文永三年入道ゐ。後恵い高世のと年なりさうど
後嵯ゐ。ゐ紙ゐ。ゐ紙ゐ。ゐ紙ゐ。ゐ紙ゐ。
思いてゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

教改帝道ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
後恵ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
で。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

しうの人のわろ歌そこなはるまことわろかはし

清輝弘安十年

勝命云清輝卿ト云ノ人ハ

ものいまぐ〻ともよぶべしとぞゆるすとぞ

まことくりの物くるぶるまぶるのこうさとし

ふるされうるこゝとくゝとしそなん給ふ

そこはたまいつるも古集とこそこゝろひく

方第集をぞつくりとくみくる也

後成月撰云ノ歌

後恵云ノ家ニ位ハ乃ノみりこうまうせ位つぞよ

ゆ孫の中ニハ位のまこゝろすぐれうとあづひ人ハ

まそ世うくまうこゝ一位れどそれとぶうらひ位べう

らどまうこゝくうを位乃んこゝゆのこゝうぶ

ゆ人されい世べの社風ハうこゝみく

うづくなりうくうのうれを

こゝまとるんゆうこゝりそのれて方と思ふる

といこれうと後恵又いこくゆにわまゝ〇こゝん

のゝ位を

れるうぶゝまうふのすぐこゝうまこゝそこ

いこゝまこゝぬみ〇のゝこゝる

これとすぐれうるゆこゝまゝいこゝこゝまいこ

こゝそゝはこゝゆこゝんこゝり位ぶずる位

あづまのくにの方にまいりてあべのくにに
ぞ行ぬとかたりてこれをうりてまいる
後恵雅後妙秀方事
かの方にまいりてこの白れいをぬ
うと云人ありやうへこれをたりやうの方に
きしをとひあづまにてあべのくにに
うんうとかたりてせうとくやうとてもいうも
行ぬまいらぬくいひそゆうとて捨とをべ
きふしとさいくといひわうれいむきに
ともわうとくりやうやうもとぞ
後恵秀方事

甚深り我方に中にまいり宮ふれぬを
みうの山ふきとりきたりて
ふりとうというちまぐれて
うれとをんかのあぐひをもんをありふたり
なりうり世のをとりあぐりあくいふんを
わうがくをいひうとたまへとぞ
後成清捕方事
頭服ぐしの山ごうの和方に判ハ後成清捕物ト
をとをたまへとうとを偏頗ある判をか
ぬよりうくをのやうにうりあるへ後成清を
我もひらをとすとありうをきをてをも

あらゆる世の中はひまれいさるくて
いくばくやうよいそれ哉。清輔朝臣相ハ
いとゞう清廉なるゆうして偏僻こゝろ
はなもしきこゝろにあらずとものづゝくんのある
べくもあれば哉。こゝろをあやまつて
あゝひろんぎられ下ゆうべんのふるものうを
いくてさくこゝにいひづるもみうり哉

隠作ちゑ

あかつきこゝろを判ぞうゆう作ちゑをかくるとや
いひあゝ日くんより出てゆくしきたるゝ
又名あゝいれうとゞかゝりてくれりて

まゝろ事わかくんかくちやうそうらく
ゆくこゝろいくゝあゝるべくあゝ
道因卿よ志深事

はは道よんゝ一ふくゝゆうしよ道因入たる
びなれ和ゆうセ年よたるまで秀卿よ
ゆせゝまくゝいのんゝあゝりかゝりすゝこよ
しくゝ月ゆうゝゝくゝゝあゝるゝゝゝ
あゝる方合よ清輔朝臣判ぞうて道因ゝ方
ゆうしゝあゝりれゝゝわゝゝ判ぞうりゝゆう
でくゝゆうくゝあゝゝとゝゝゝなれゝゝ
れゝ章くゝいくんゝあくゝゝれ

こそあるべきなりつれどかくこれらの中ごろ
なりくるみくるべきことにあがりろうりろうや舎の
時にとうとう篠帥の庭のきにわのしるく
日さうとうとうとひとそひめそらんとやろをぐこに
みくとめくこがりつ他しまくこうろうしき
なるべきなりのまーこんてくりさ千ざひも
えうつれねーまーいかの八方ゆくのちのゆ
なりぬるまでおさわとうもうもみちょんざ
しふくつちーねくこそ俊で十八首をいま
られうろうゆものの中りこうりくなくこぐ
とおーつうろうこびひとりいとこんねうりまれが

こそわれれどりそいぬ風二首をうろうくせうろよ
なくこ枝こうりろうとこそこうーねうろゆよこそ
隆信宴長一雙事
ちくごろいぬ澄信宴ものひそわくこうりんの
くらうよおのーやうよいそれねさの後恵ごいを
て百首と十そびくこ十宴ようみくこ十宴の百
そこうんづをこうこのわりろ俗ようんづみくと
のくいをはうーこうろうにいびまもわくこざ
ひとうろ又後恵のの千首ようゆ也ねうろ何ようる
ゆくくようんこうれんづのいをにんのりこづひを
ーこうこうひとねのゆ

はつかこの十そのあいだのことそ在物もうびはべ
くあがめれとあんいそのうれうりもちわるとを水家
屋右大臣とり時ん〳〵くよ百首とめされりよ
隆信作ちよ入くちあるうらよりゆすかか
くて物さらづうをれいぶとうつしさ所と
あうりうるもそのころ宮ぎい出家ひらして男
ついくまもわりぶ海をこのどやうよあんでて
を部の百首をみどさたてくりいづうを
ゆよたくしあくまうりうれいぶそのうさうり
家道ちたあつといふありうきぶ所ちよ
ちいうるあこのちくあのどはくりとが

はどひそあうそくまそあうせうれうくそ
ひらよ潘作うくもまそくしか
ましうぶうれの所ちそやこあまりうし
あきいのちひなどくてがくみちのうどとが
ひうあしくそいそれうれ

大蒲小侍従一双事

ちくあうあうのよてひまていぶ大蒲小侍従と
てうらくまいくれ侍うぶあいぶ海をこう
ああどちうくあづうくうむうこいまうり侍
侍ふうあやうあおどうくあうのこすあうあの
をどれうりゆあうあれてをうあまき

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うりてをわりうん斎道入道ぶつこのまを
をいこじがりく

具親卿とわざくの事

きうこの具親小将景家のこのいとうまをとうこ
のつこ行ぶにゆつてをとあるうんぶつまろ
わうこんうの井をとぶうれくこうこうまで。
これのゆるをのこのこのちゆこのひこあうこうこう
こみくこうくまんよすくこのとたまーとこうぬ
こそこうゆーこきまうこうひゆ

舎弟よすぐこうこうまー

ゆをよわこゆゆ行ーこうこうひるひとめづ

しきゆこをわうこうこをのうこをのをとうこと
こうこくまれこそまこをいをくあわこうこ。私
をハうこくかこびぶ様こんこをやこうこくこう
ぬまうまこれりこうあこうこあうこびをのよ
こをわりのまくこよこわけこよこのこあーまこ
かこびぶゆをんこびこたあうこ殺作こうこば。
いこうこきこをまーこそあこうこいをこんこくう
ぬわこのんをこのこりこうこうあこうこんこくこ
こくこのこをこのこうこうあこうこんこ殿下。夫
儒ゆゆ房ぶ家ぶゆの源業道予とわこうこ
六人こそ行ー。愚孫よ。ゆくあわこうこ前ぶ。

雪さえふかまさりゆくあまの川
あまくだりしのぶ山もさくらうと
うちそびきいまもかなんかたくさき
卯花月秋さうふかゆく
ちくかくびうう所
三井のうれ月のうつのうすりみち
てうとうとあきうれのうち
うえびさいるぶのうりうるさ松のあ
あしの葉ごうへうしのさいうの雪
うんーあさーいよ所
きのびーよまりうつかうれ人

りのあり人神のうらうてぬまし
あびうるうるうわうるのわれうり
きうれうてやうるびきれく寒
寒蓋顕昭あ人事
この中に芸の方をわまうみく寒蓋八道
りうるしー時このうりの方をうーうくでん
わうれうりうぶかうそあてまりて美ぶでよ
かうぎうく時よいうりくうれとうこのぶのへた
のうの方にあのびくさうれ花とうまれ花うる
秋方にうううぶびんまどうふりまくわり
のまうにあううれきうふとわりびうんふり

しぞうしはらいまことれいぜんあるべきとぞいてく神
ゆうの人ともいとれざりしと我えつつみちよあれど
ゆえことをくるみありものくに宣湯門院の御供
花の命の方にぞとて夜ひとしほ山の紅葉
うごきまどはしのやまとぞうしをと
わるぞんを逢ひたく我方のうしにうつくしかる
ごとしはしうぶちうれくて面白ひとうく
実ぬ人のうたんぞうとしてくの人の御とかりんとす
紅葉ひ我面の面白あるしくびのまーとな
がくうさぐうて行ぬあしくうんどのみを
の得分りの月漢かくもぞそもいぐ侍りん

武蔵国六浦勝方の事

武人ら俊秋の髑髏ひろ秋中納言ぞれ大納て
ものぞ武ものしあるぞりくれたりまうりとぞ俊大納
云ふもうぶいどやもの人といぐぞうもうの物
なりひとりいぐ人とびと行ぬ中納言か
さうくいくぞ武ぐ方のうぞうをを山ぞ
その月ふ方とそのの人い表方のやーー
行ぬていぐ俊ていくぞれぐのの人乃ちん
ゆーとうぐうぐさりうれ身入ぬ海ぞ
よんれいぐうをよぐすぬ白いぬうりとう
ものうきくぞとくうれあぐぞちやくうと人とふ

でさいしゆくぶんとものまきあつめ人びと
とのつゝそれぞれまのとびとびとまゝ
あつまりこゝろ〳〵ゆかりうたれり
ふしみのふんわりぶしまん或アと面さうこゝ
つゝれわどそのこゝろつゝさ金さまも
所合たゞとみまいわゝぞうとびさうり賞
じて或アいとれこゝまあひうぶしまん或アが
二首の手とどんまいぶるゝてこゝせといつ
ものいとゝ第もすゞこゝろうにゆをこゝく
文をこゝもわりゝ枝ぶ八納をいぶこゝと
つゝれこゝのかゝゞつゝくれん枝といふ

市ふこゝろこゝまと金さんと或アあゝゞゆんゞ
勝芳ぶ八納をひこゝゆまこゝれこゝまあゞど
世こゝゞりて或アとすゞれこゝとありぶこゝ
あれどんゝ乃ふこゝゞいゆゝのあゝ世ふゆそのんゞゝ
りこゝりこゝ枝こゝりまあゝあゝこゝれこゝい
或アこゝゝあゝこゝ上て中あゞど方れこゝまひゞて
ものゝぶんゝりゝあゞゝのゝ枝ふ保ふまはこゝびゞこゝかゆ
こゝこゝゆゝひこゝこゝ或アゞゝゆ日紀といふ物とん
枝こゝぶゝゞこゝふぶ八をこゝぬかゝこゝそあれ
どゞこゝりふをこゝふこゝこゝゆこゝこゝりこゝゆこゝそのこゝ
乃こゝ海ゆこゝこゝゆゝゝゆこゝれこゝとゞれこゝりひゝみこゝ枝ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とこそいはれけれ。まことにかくのごとくなれば、
世をすてゝ世のあはれをもあらはすなり。
べしとそうの或ものがいはく、
さうはいはれぬとのゝ
今れを審の道にもあらぬ。
らくはいとて思ひとるべきにあらず。
うの門結だくこゝろゆくしるべかの
とそうひとこゝろさしもなりさまもわりえ
ありひとれるこゝろびとくしもわるゝ
ちとくよたきもあるうえんもあるべし
きうあるとはぞうれば徳ゝ有よこの

かゞとまるこゝろくさぐさのうんのあるもの
いつゝのとゝろとゝろと或アが表に有いづれぞ
えうとうんのふかうあるとしてこゝろ
ゆべきにこそ。さとへばのわるうしてあるべき
ものうのうとゝろとゝろぐ〇いたりなるべし
くたるこゝろにたりうそあわどうとる
などのうびひさうりたりとゝろうた
らびゝゝゝとゝうんまるぐ〇りふたりん。
さうよゝの高ゝわゝどりのたゞひさ
うにわゝ孫どれとあの上ゝゝたりごとさうびべき
がごとくゝゝ。ものゝ上ゝ金をへをう

ゆべうりうりやうりいふぶうのうぎんあることせてに
うりう物おれぶうの世うりぐやうりうんとうりう
ぶのうまうりかうまわうりうとうぐうんのんうぐさ
ゆうりうやうりうのんうぐうんぐ

近代古祢

わうんゆうぐうのんのかんうまぐうりわう
まうりう中ぐうのんれぶうのの祢と槐うりんを
とうの世のかーとぐうぐうりまーのやうまりひて
や蓮摩宗なぐいぶ美名とけうてうり
わうぎうりうぶうのぐうやうとうのむんゆ中ぐうの
祢をぐ倍ようりーぶんぶなりーうりう梅風く

宗海のうぐひりてうりうべうりうわうりび未
笠のうあ。毘悲をまぐんひめべーいぐんうべ
うりいぶわうんゆ蓋れいこのうの方紀のお
りうなりわうりうひるれいたやうりいぐうぐうん
あぐーんのうんひ月りーの紡度ともうりう
わうよ祢のいうをうりうりうれるれいぶわうう
ゆうりうぶんのうをぶりぐやりんゆうりう
れんりうりうぐひりてぐーりゆべーわうりうこい
まーをんの歩んのぐうくりうりうぐうべわうぐ
ゆうりうすぐうりうれうあぐーうりうんーい
ゆうのうぐすうぐうりうりうりうりう

まうをくいひろりあのいぶもゆへごろうこるま
こそはゆ匂みそがしにさぐまりよれど万葉
のこころみどまでいるる代初んごろなろんぐーを
つぶろろりまくわかぐろりすぐこと集を
えこはざりきろまやとみくろ中ごろ古とのの
ろこ記貫ごろにそかりて其さ海まろくま
まろれろ後撰まあ一き三あ古今みろう
ひくされてのらいくかぐも〈ざりれば方えぐ
ろてすぐことばえろずふとここせり拾
遺のころこの祢ことのかくこのちくな
つとそことろろまかくわろれをぐこすかか

なろとろろこひそのら後拾遺のころ今
ほこーやろぐそむーのれをとすれろやも
その時のふるさんかぐこれをうきこころろ
ろや後拾遺をぐここあづきてらちあ一武
こころきをかこぐある兵蓬あころ侍し
金葉ゆわざこもわくーかんこうも拾くく
なろ三のあわろ中詞記千載大略後拾遺の
風ろべーこのれむーころけころこころ今
かくのごーかれば拾遺ろのちろろこ海記
ろろーてひこーくなろよろ必へり風拾
やろくつこ親これりてこのろ時よこるぐひ

てはるかへゆくむかしのいにしへをおもひまぐ
月を形見にもてりみぐとをすーきん恵ひとすたぐ
ひとをはるーきこえをーうぐ今はそのいひつて
しそ雲の中よさ海ぐくの雲をりめぐりわり
ようりてめづーきんをそへぶーきこと
なりうーをうぐぬ命うよやもうとたーみと
くぶりひうれぶめづーき風情もあくなりゆ
くまれくえうれども音をあうーうあくろ
ぐどなれぐ命ーうぐけうさ海なりいん
やーぐれいうりてはひつうーて雲れぶめづ
ーーぐーぐもあくぶーうふーまあーぶと

なりう秀逸あくーぶめぐ七めとうむぐ七くの白ぶ
くくりーをくくりうりぶくいい海の
人ぶのう海の世くれうーふうくれーまうくを
ふうてくくーよ古風よかつうく遊玄祈を海
あぶくのいぐくくうう命くれまうりて中古のぐ
まくとあーぬうりーぐうをれぐうーてくり
あぐくをうまうわれーぐまくくーいりくつぶ
まーば上ーくーくあくーいづくくまうむうーぐば
くゆう清輔形改後恵登基ぐーぐーみうら
とぐいまの世の人をくくくをいまあうくぐ
たのあれ中うまうくーうーぶ謗家くく

そもそもかの歌をこそは文とは
いとをかしうしてはべる中ごろの
人の作れるものを
今のよろこびとしてこれをば
の中にまぎれうくまぎれうるまとあるど
いまのよのいとをかしうあるひとも
ぐくのくどおろかなくいまとおぼえぬ
方より偏頗ともまぎれさまざまこそ一
よの歌をあつめしくいでさうやうにはりつる
ばひぐまりて分る言をのあんいとをもて
まことをむあつめしくいでさうりとて
あるべきをわろくべうしぐりろうる。

うぎりあるみ歌だまもうにあるまろ。
うのうれ小国まてんのんぐせのをろうたるに
ろうくうろくのまをもしうまろへぐとする
うてをそ分れまして京のハやぐうをのべみくをよ
ろこびうんたるあれば世のんろりてあそびこの
まんまうすぐうろまやハ侍ぐさうにいそんや
さうにくいぬうくいぐあるまうあるど方
栄まぐハまうあ。古今の歌ぐうもとうくも
ひんうるぬんのこのあんをびまうへかの集の中
ぬさまぐの歌あうーうあれば中古の歌の
をぐうも古今ろいぐりぬ。この歌玄のさ海。

この集ありいでくるたびにいまのとどくことは
みつからくみわたるよの世わたるなりけれ
このみどころまでとどくことはずえくびのせられぬる式
の集をば出べくしぬ式をと一向にみてぐ式を
ありひくこころもいかにへよ中古のさ
まに。對をくはくうみり問こころのふるの様
いづれうくやとくみ秀句ともえつべき。言葉
中古の歌の様いまのびやとくしてたつも秀
句ハかくうぶなり。親ふりく風情ぐりと強
くとぐくゆへありとその様をひぐくてくく
あとつればうくやとくしのさ海ぐくりきり

りてすぐくふくれわりて奥ありぐる
ゆへあり問こころくぐくなりぐいつまもれ
いくくまくくいわりくりうをくみとれを
くくわくくふくくもの勝劣とくぐし
ぐくこ言こ勝負をくくくくくくくくくぐ
りもくくくくりくくくくくくくくくい伝くや
あぐくく第一へたりまく伝くくのわくひ
やくくくくくぐくくりものゆへいかくとか
らくもくりくりのへのりぐいまるびやくくれ
くりあぐるくくくくのへの様治いたくくひくくり
ゆくわくくくくくくくくく

ゆうまようきいそんしゅ。華經に默照法師など
いろいろあんどころをえて。我さかの
人くのうむゆうまはぐらぶそうめうして
いわそうくわさてんさそこはこうしのめうぐ
しきれしゅんのこころをこびぶかこうりていはゆ
ごろのんくわまこうわつまりて行ゆ命に
はうこなりうくんの弁ごうときこうりうを我
ありひいこうこの風情いつこうをかりうこ我つき
こうつうこうりいぶれいうりうりうりうりうりうぐあぐゆうう
こそあうりうぐいうこうこうもいのうぐあこうぶり
ぐくうんはしぶうこうわうこと陣衣のは今ろうは

うこまろうしうこうぶろうこうとありひうこうぬまうとの
こんぐこうにうまれしうぐこのこうちぐやこうこと
あくぶこうりうなこうまりうこうりうにうかそうう
くこうそあうぐくはしうぐこうれいうこうもこの我を
ゆうこうまり譽法あうこうのこうひうりへあうまぐを
こうこのうちあうぐこうまりへぶれこうこうあはぶこう
つをぐこうくこうこうまりれうかうこうこうや風情れ
らるんのうまぐこのまぐこのうまこのぐうはうはぶしうく
こうこうこうまはびしうこうこうこうこうこうこうまう
あうりうのこうこうばこうぐこうまりこうまりこうくあまりの
こうぐのあなぐこんにまうこうくこうのぐこもあうりうを

たちんやうとそめがてゝ作ゝ。やうのゆゑびゝ様と
いえつゝりこそぎん人のつゝすてゝうゝぞゝどうと
ひろ元そうのさまゝ代まものぶぐうりゆゝいとゆの
毒さひくゝ風ありくゝんのゆくゝわられひさゝ月の
わりの風ゆくゝだれぶ毒れふさゝぶゝいそゝぐ染め
づゝくゝりゆゝ時ゝそわれぶゝてゝぐゝもゝれば
金ぶんゝゝ色ゝもゝそゝぶゝうゝまゝ物ゝゝ
めゝわゝいまゝゝめゝゝゝつゝなゝゆゝこゝゝまゝてゝうほん
とゝゝ様ゝぶゝそゝいゝ方ゝゝうゝゝもえゝんゝゝどゝたゝゝ
毒ゝ毒ゝ着ゝりゝゝゝぬゝゆゝうゝの流ゝれゝ奇ゝいゝ遊
金ゝゝゝゝゝひゝまゝわゝゝゝゝゝ達ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝ同ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

い詮(せん)てごとごとにわかつまぬ餘情(よさ)をぞ
みしあらきなるべしぬるこころあらく
こゝ紫ゝも艶(えん)さいまりぬれぶこゝまてこれ徳(とく)を
をものづくりそおろかとこそたゝへ秋のタぐれ
のをもしろきこゝろをもかくこゝろもをしぬづく
いつるゆへあるべしそもゆがとそ神どもそこに
なるみてこゝがくごとくこゝぬまとをんあさ作の
をものいろいろまいらづと思こずぬぐめよう極る
こゝおりみちとそをりて作ようきなのこゝろ
きゝわわごとこゝもあつこずふくこ
のびこゝ音(けしき)をぬごとかのくこゝろをこゝろを。源

をはこゝてうこゝ神こゝをちがりてこゝをんこゝりも
ふんぐこゝうわこゝれふこゝゆぐこゝがごこゝ人わこ
なるこゝ物をぐこゝのはこゝもまぐこゝいこゝずこゝりわこゝ
いこゝでこゝをこゝこゝとかんこゝくこゝもこゝしぬこゝかこゝちこゝの
ふこゝいのこゝこゝ人こゝすこゝて風情をこゝくぬこゝあこゝこゝん
人のこゝこゝりがこゝこゝこゝとゝいこゝりわゝゝぐこゝぬまこゝあこゝ
なこゝこゝのこゝこゝこゝあこゝがこゝこゝこゝてこゝそこゝこゝも歳
こゝこゝぬまこゝいひわこゝこゝいこゝこゝりこゝれこゝり作をこゝて。
いこゝこゝこゝくこゝこゝ有わこゝこゝこゝよこゝこゝこゝも作こゝわ
こゝれこゝこゝとゝぬこゝこゝぬこゝこゝあこゝこゝこゝくこゝまこゝ○ゝぬこゝこゝしぬこゝこゝこゝ
こゝいこゝひこゝわこゝこゝこゝんこゝこゝこゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

こゝろこそ。餘情(よせい)うちこめたるこゝろ

うつくしき姿なれど風情(ふぜい)おくれぬべし

とぐらく作りたる。又さもなき風情もおくれぬべし

かぐらく作りたる。この酒(さけ)とぐらくすぐれたり

未工(をくのたみ)の所作

うつくしく入江のうつせり

わがゝなみうつる秋の夕ぐれ

こゝろもとゞまるうきしんよ作べし。ぐしきき

親(したび)とつゞをうたゞやうとうたるやうなるも

あるいは先(さき)とゝまべしあるこゝろ

月さやかなるのこゝろよあれあり

いかゞうたるあり何のこゝろ

うれいこゝろ。いづくとうたるこゝろをえたり

てちりのこゝろをうたるもあるべくこゝさ

しあるせつなるこゝろわたくしもまことにあり

きなるこゝろはいかゝれるやうにもこゝろ失

まて作べし。匡房所作

ちりとんあるよ。ちりみちるのく

うつろふ山ゝ。ちるかゝりもこゝ

これてうぞきこの本とハ世ゝ作者秀句を

あくぐわつとぐらるあけまですぐさつつて
きてげよいひそでしやのうくとしろさ
ありぐうへぐうら紙のごとなるうりひるあけま
どりろくのえりすぐれうぐごしぐろ川の
まーぐきいまりてうきいあぐでもきまぐきえ
この折いやとにやうえぐさりあくくくしひと
のぐもうぐひぐばあやーのうーはれまりめぐ
いうるさうひよいうどしてぐうこいそぐうきあ
なるまもまこ

いあるむ人へりうやはのうよの
あはもわうのうれ家ーきと

これいぐあの方れやうぐりあくうとしろく
あぐいあるる紙ぐいうりうをやうなりうあうへぐ
結出のうりうあのりぐあぐのごーさやうてん
をくうへ筆とふうへるあもありまぐだぐやと
うよとぐくあそぐーうもうへうりりへう
ありひうりぐりゆをいみをの秋花
何うぜうむーちりなくあり
この方ぐうりわるうぐひいなーぐ六月の
大方の寛筆が日まぐれとぐ紙どれぐさむ
くなううぐあうへ人ーぐ行ーぐあかてこいうなは
ん羽あれどわぐうりあうやうよあり八年

うりて失ぬすびしぶむとぞぬるに所まどを
そめぬ野べの草ぐさに花まじりて
をあらひがごとくぞのづからうるはしき
やとうういろゆうるぐ秀こ斉りく
行かりぞ千ゆふ秋宮の神いつくしきなりぞ
風情をかりひえぬしるしぞの面てこそつくり
うべ義ゆうをゆるぬしぞんさせるこなを
までぞぬぐこそぐつぐこそぐつぐこそぐひふくいひるど
つまぐぞうしくこそ
風のをとに秋の秋ふく稲ぐあして
ゆめれあぐりをぐ思ふ

一ゆふ吉河のこぐれもりあををとりくぐ行う
しくいひるぐ女ぐ行ふ
わぐをこれうこまいうひの秋ぐを
ぬぐさのうぐぐとうぐそふるん
かりんのあさふを行べのくさわく
くうひうくこぐするくし
みこくこうくぬこぐぐとかりうくつぐをるを
わぐぐも秀白とたうう
うりぬるうふうもむうわぐうく
人をこひしとかりふこうふ
かりひぐる紫ぐ立りむをふうう安れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
あづまぢとわさらしれいりしや
まのくにさらしかすさわるまり
ゆざれいかへりの社風方をみく
うづくるくれりふくくされさと
うづめの方へずぐさきげまとしろされぞ
あるまりふしたるのひてきさめりの弁
こと紫はぐひやうくれぐやぐうりれ
りひとれりあづまぢの弁やりるくれりへ
あるの弁あれいかへりうまれくけさうしうに
とさとめ松風のくるびしきとうるる

ゆよりりふくさのくとまるりわ亀
はくてかくべくるぞれりうてんづべ
取古弁

一まへ古弁のとりあるみやうわりふくさ方の
中くりおくき須の弁まるちいれくかざ
つとりるべ弁とりてやりるくけぐくべ弁
なりるあくへ
夜の秋うくへどしくくあいくるり
くるれくれりくさうれ水
くれくれ弁りくあるとかるとむとひ
くの古実とくるりてやくさかくき須

をとをんなうばのぞう。やうてこちらーぎり
ぶぐ者をうるうちわ[illegible]
うりうるべーかのうて[illegible]
ゆかのようりてをとなり秀句をいうるべう。
あるとなくくろうて[illegible]の神のぼーくとりの
ぶぐべさをとんとうとうぬ[illegible]
ちうまあ雪でふりうりうとぷーつまうとをうう
て月の方のようぷ水のようちうまあうりうりうると
ようりーとをいうれでまをとのめをみようかを
なうあり方命(たん)ぷうくまうみくうそでは
しくまうやうりうんあがゆうとそん

ゆ[illegible]ぷ又ゆ方ゆ[illegible]合ぶう月のちうを
ようゆーぷ

いとうをうをまや第(たち)ーなが月の
わりゆの月よをーうわくうゆを

この方いをとうーやうーとそかちうまうさまぶで
定家朝ト尚庭ようく雖ぎーれさかの素性(そせい)ぶう
方ようーぷうづよ二句こそかをりて伊勢ゆう
ぷわりくにうをうこの句をきうくよの
句をとにのーあぶぶりわうあめうをこそ
うりまぷれいうぐりうとのをきを方ようくむの
句をむをぐ句ぐうかをわうは雖ぐすべー

とのゐ侍し

假名書事

古人のよみたりしうたの序は古今のふの序と申すは記いはいとゝんのことゝ申しに
あらぬ和文にて仮名物語のゝ草子後撰
の奇のことゝ紙まるの物語は源氏りすぎ
ゝりのゝ序これ〳〵をおのゝ〳〵べきや。
いづれもくかまへくまるのことゝかゝじを
もろおりふのとゝかゝりいゝゝをやりを
ゝくちゝなれをとゝはまるてかゝそれ
とりてゝゝうゝ文字八枚はせい文字のゝゝにく

きゝゝとゝみるもそゝかゝや万葉りは新
雅とはゝゝとかゝりは古今序りは書撰とは
ゝゝかゝこれ〳〵みるその純なりゝ文とゝの
かゝりとりとめて歌とこのゝかゝゝゝ
げゝりゝりゝゝ和歌をかゝ〳〵歌とゝゝ
くゝゝゝは真名ゝゝて。假名のゝいり
わゝすこれはわゝゝ時のまゝ文のゝ古今序。
和歌ゝゝ書水りをむゝゝなゝゝゝゝ。
えゝゝぬ和ゝりゝゝものゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ和ゝゝとゝのはいゝとゝゝゝゝゝのゝのな
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神ありめるみどりのやうなる中にあるひさ
めの気をとりあるひはめづらしくあくるあり
やうりうりうすべし。勝命うるかにりのく
中は清癖いうづきよ上千〻中まも初発の
新佐の日記いとおもしくをうをの花のりとよもの
まもしうとさしりかきこのりとに柿なりの新と
うきをこうりとあるかとなすとこにかんあるのこい
かやうよかくべきあり

紅浪名

なこのあいわまこありの花緒入道ういひろこと
てんのこうりしいとあこるのこけづらたなかんさ。
うれてうこあなこいふみなこのあと
としひれどいるるをしいてはこさ
まりうきいそのこあるの有りりくいふ
ここうて伊やあみどこるいこもこび行
ど。顕昭りうひ伊うばこあるこさくな
雅なこいふこありこれいみなちいこさあこ
のあとこの度暗あれば時よきうひてうち
ゆうべしこそ伊をはうこの志あるいふ
有よあこりあ中のつあそよかこり行しい。
つこしよりて南のこ大渇薩ケのかどいば
まのこあこやまれこかこなこうみなす

ぬぎてとりあへずかれ給ふ
まろもまゐ。空月りうとぐのみとゐひ
六月よりあつとぐさるのことをんゝ仰ていひきう
月さ月といふゆへくやいとくるあるまし
あるりいさりれ若狭
あるりへうあるりといひりりいふ問まや
ことりうりてあ。れもるをぐあるりこる
づりゆへべよりるこいりりこれ菓乃
あゝの兵衛へもうまとよるうあるまし
あるかりこをふくまゝ
あるりへうに梅壺仲ぢらめくるのかまてぐう

くゝ時ぷ月みりいづこりとふさるれぐ
あゆくそこれをるぷその時彦宮うこの
園まはむりうりるうぬふくまゝこりゝ
ゝをるぐぷるを中将のみうの清
うきぷゝあやふくるのをるづひくふをを
仰りれぐこのるるいぷやうぬのるりゝを
侍くるもの時仰りゝばあるれぬゝのるぐろ
うをいゝ拍あるべぷれをりと仰ゝりがく
あさるめて仰あるりるいひるる中将のみる
ちといふぷるゝるのあるんる
右仲みやぐあるそぐりてのぐるまゝ

この面あなうぶ住とて
けくらぎをかりくぶ去捷十二合よりくぶりて
のぶりられぶ人あまりくくて第へいりくる日ぶ
二条大路あぶこれをりんのまりせぶ地りくあつ
まりくぶくるる面ぶぐもあまくくてありくるぞと
頼実ぶすきぶ
大条ぶ尉くくん形ぶ実ぶぶぐぶきれ物く
和斉よぶぐくくてぶ年ぐいのちを
面てまるん実ぶ年くまくくとぶみし
よいりくまりぶのぶ年とくぶりくや
まりをくるをくるをくるまぶれいくぐきいのり

ぐもくるくきぶにありくるぶよすくくるの
ぶ祈つき法くぶりくいのるくまくぶ
わるれあるる

去条ちぶ屋ぐいくくわくまぐるる
しぐれすくるも河面をあるる
といくる秀ぶのるまもくいぶんぐぶぐんをくる
してぶれよぶぐくくゆへありぶれぐこの
くびいぶくるもいくまぐぶきぐくぶれ作せくるぐ

小路小町事
あくるんいくくなくる朔ト二条のきくれ
ぶいまぐぐんよれくくまくくぶ河ぶるん

うりくゆきさりくとやさうこうちよぶうんきれ
あるうーいうりこのまゝ日本紀の式りゝ
ありごとのこゝあかの物ぐうりいあるごく
たうたにうりくぐうひうへーきうに付きうとき
ちそのいきごとりやまぐうくておりひう
のあうんのぐうぐあるとうくぐりきうあれ
どあるがたのうもううあまーあれがんくきぞ。
ん和こりあのこゝ思びくすぐさうよおりえう
れあうんかみ物ありうんとてぶりあうりうう
かぐうりう方桃どうもんうくすうにことよ
せうくあるまのうこゝゆうさうりみちうくいう

ゆうてゆとぐまくいうとううてぶぐうう
ゝう夜野の中ーよ千のこの日を物ひく
こありうその初にいうく

秋うをれうふうりはうそもあるあく
というあゆくあるがてぶとうぐ○はゆく
これをうむうこうにんあうぐ死んぶ
あうりゆうありあるなれこれとうよ。
あるごうのうそのあれのあるうりすうき
あんひうりあうでありうそのもうくれぶん
うびうすびくとうこのかくきうこれぶあゆく
あるくてあうりうんゝうこのまとうこあう

人々うちくつろぎ小野小町がのぐぐりて
うの花にていのちあらばあらばかくもあらばとぞ
ふれかりしかりいつまでかはひしわく
出たるのく杉がくれなるみづをとくとく
下の句をいきくるに
をのこいそぐすきまいり
とぞつきぬるの野ぶ所がとりてをの
いひくくぞ行くあるにもたりのこもちや
小野小町とぞのぐ人のあるぬをとんて
ぞつくるきまいよりてあくるひ行くと
人のかくり行く

おくと秋のまま
ある人へうぞある三の合よ八月雨の所ままやのと
こ移もうきるべきうのくくりぞーうあくを
清水補ト判だんそぞくくいつあまぞ
ようくずくそまけあるこのみいのくるもあれ
どもこのまま心行くるんせくく後撰よ
あけちくくくこ移きをご寄るの
なくあくきけばあさ井をくれど
とくあくりこの寸行がぐぐぶやくくぞこの
雅をふぐぐさのーぞすぐく和寸れ祢を
ゆくぐくなりそのゆくぶぞのなくひ世り

きてゞひくらひのうをゞこゝろあり貴ゞうこと
ゞありぞうあれゞ古集のかゝとてみかめゞ
あゝとあつゞ屋うゞゞひゞされゞ古集をうゞ
ひうまわゞゞ時の風のこゝなうゞゆへなる。
ぞうあきゞ古集の中ゝさ海ゞくのをゞこゝと
ゞ一偏ゝゞゞうの中ゝうまの世風ゝ
るゝうゝとゞんをゝひてかうてゞ川ゝうの
狩をゝひうゝかゝの集をぬゝもゝべきゝり。
かの後撰のうゝこれゞうゝゞ撰集ゝうゝゞ
もあゝゞまゞ弘を貴ゞゞ古千の世か
きゝうゝ矣ゝりゞうをの秀逸ゝあゝゝれゞ

こゝまゝをゆうゝゞ次にゝゝをゞ古ゝゝゝゝ
あゝ井せゝれゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゞゝうゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
これを後撰の風をゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝこのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鴨長明抄

元亨二年五月十日於久我殿

GANSHODO·SHOTEN
KANDA TOKYO
東京 神田
巖松堂書店

本ホン
イ
ト